みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

スーパーマーケットと市場：デンマーク領グリーンランドの現在(いま) (FIELD NOTE)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2015-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 齋藤, 玲子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5611

FIELD NOTE

スーパーマーケットと市場

―デンマーク領グリーンランドの現在(い)ま―

齋藤(さいとう) 玲子(れいこ)
(北海道立北方民族博物館学芸員)

「どこにあるかはよく知っている」という方も、もう一度地図を開いてみていただきたい。時差はマイナス十二時間、北アメリカ大陸の北東に位置し、世界最大の島として知られるグリーンランドは、日本人にとって距離だけでなくかなり遠い存在である。

一九九六年八月、私は博物館での調査のためグリーンランドを訪れた。わずか二週間の滞在ではあったが、あまり知る機会のないグリーンランドの現在について、その一端を紹介できればと思う。

マジョリティとしてのイヌイト

グリーンランドは「エスキモー文化」の最東端に位置し、その研究史上、重要な地域として注目されてきた。約四、〇〇〇年前までに最初の居住者が現れた後、近現代までつらなる「エスキモー文化」の基礎となったチューレ文化の担い手たちは、ベーリング海峡あたりの地域から拡散し、十～十一世紀に再びグリーンランドに到達したことが知られている。同じ頃スカンディナビアからグリーンランドに移住してきたバイキングの末裔(まつえい)が、一五〇〇年頃までに姿を消したのに対し、イヌイト（エスキモーのこの地域での自称）の祖先たちは極北の地に適応し、生活を続けてきた。

エスキモーの総人口の約半数はグリーンランドに居住しており、カナダ、アメリカ(アラスカ州)、ロシア(シベリア東端)と違ってイヌイトが社会のマジョリティとなっている唯一の地域である。グリーンランドは、十八世紀からデンマークの植民地となり、現在もデンマーク領である。しかし、人口五五、〇〇〇人のうちおよそ八割がイヌイトのアイデンティティを受け継ぐグリーンランダー、残り二割が非グリーンランド生れの人びとであることから「デンマーク王国内において特別の民族社会を構成する」として、一九七九年に内政自治が認められ、さまざまな権限が国家から委譲されてきている。

コペンハーゲンを発った飛行機の中で、まずグリーンランドへ向かっていると実感したのは、機内放送である。グリーンランダーのスチュワーデスが乗務していて、デンマーク語、英語の案内のあと、グリーンランディック（イヌイト語）の放送がある。グリーンランドに入ると、まずグリーンランディック、デンマーク語、それらを解さないと思われる乗客がいると英語の案内が入る。小学校では一年生からデンマーク語を習うといい、ほとんどのグリーンランダーがデンマーク語を普通に話す。博物館のパネルはもちろん、公共の場での表示はほとんど併記されているが、新聞や本などグリーンラ

ヌークの市場。建物の中には海獣類がごろごろと横たわっている。

カリブーの肉が並べられたテーブル。8月中旬とはいえ空気はかなり冷涼だ。

ンディックのみのものもよく見かけた。アルファベットで表記されているせいか、もともと無かった事柄をイヌイト語で表現しているせいもあってか、一つの単語はやたらと長い。しかし、グリーンランダーの研究者によってグリーンランディックで書かれた博物館の資料カードなどを見るにつけ、これが当たり前なのだと納得させられ、ここではデンマーク語しかわからない人は、少し疎外感を感じるのではないかと思われるほどである。ラジオからはグリーンランディックのポップスも流れている。言葉が残るというのは、こういうことなのだ。

グリーンランディックは発音も難しく、旅行者用の会話帳を手にしながら、結局通じたのは「ありがとう(qujanaq)」と「おいしい(mamaq)」くらいのものだったが、これらの言葉をいうと多くの人がちょっと驚いた表情のあとニッコリ笑って「どういたしまして(illillu)」といってくれる。グリーンランドでの公用語だとはいえ、一方で日本語も含めて限られた話者しかいない言語は、他の言語圏の人が片言でも使ってくれるとうれしいものなのだろう。

スーパーマーケットと市場

ヌークは人口約一五、〇〇〇人の町とはいえ、首都らしく中心地には郵便局や銀行、店などが集まっており、平日はバス停にも多くの乗降者で人だかりのする様子が見られる。土曜日の朝、人影はまばらだったが、その後スーパーマーケットの開店時間になると、週末の買い出しのために自家用車で乗り付ける家族連れでにぎわうことがわかった。

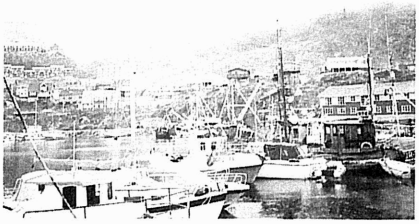
スーパーの食品売場に並んでいる品物は、野菜や果物類がやや少なめなことを除いてはコペンハーゲンとさほど変わらないという印象である。つまり、食料品はかなり輸入品の割合が高いと思われた。ただ、大きな冷凍庫の中のビニール・パッケージを手にしてみると、さまざまな部位のクジラ肉やアザラシ、トナカイなどの文字が見て取れる。数種の魚もある。しかし、生の肉や魚を売るコーナーは見あたらず、ちょっと味気なく思って店を出た。

町を探索しがてら、事前に多くの情報を提供してくれた観光案内所の人に挨拶をし、地図などを仕入れると、近くに市場があり、ちょうど猟期なのでトナカイなどが売られていると教えてもらった。

心躍らせながらフィヨルドの海沿いを数分歩くと、市場は、なだらかな傾斜地に建っていた。コンクリート壁の細長い建物の横にも、青空市のようにテーブルや発泡スチロールの箱が並べられている。ここで最も目をひいたのは、ネズミイルカとタテゴトアザラシである。イルカは輪切りにされ、皮のついた脂肪と頭などが並べられている。アザラシの方は皮が利用されるからであろう、仰向けにしてまず腹が縦に割かれ、手際よく解体されていく。肉塊や脂身は段ボールの上に並べられ、手書きの値札が無造作に置かれている。五十クローネ（約千円）の肝臓とあばら肉の一山は、ゆうに二キロ以上はありそうだ。その他にも旬のタイセイヨウサケとホッキョクイワナ、そしてミツユビカモメなどが売られていた。

ホテル生活で調理はできないため、残念ながら買い物はしなかったが、市場の面白さを知り、他の町でも探してのぞいてみた。ナルサックでは、切り身になったサケ、ブルーベリー（クロマメノキ）やクロウベリー（ガンコウラン）などもビニール袋に入れられて屋外に並べられていた。ある日、市場の前にいつもより人だかりがしているので近づいてみると、デンマーク人と思われる人の良さそうな男性が、今朝二十キロもあるクジラが捕れたのだと説明してくれた。種類は聞き取れなかったものの、大きさから判断すればナガスクジラであろう。すっかり解体され、はかり売りされている。ひさしぶりの新鮮なクジラなのか、買い物を終え

ヌークの教会での結婚式。ビーズで飾られた女性の民族衣装はアザラシ皮のブーツとの色の対比も美しい。←



←カコルトックの港と町並み。海面にはしばしば大きな氷塊が浮かんでいた。

た人たちも外でひなたぼっこがてら話に花が咲いているようである。

輸入品の並ぶスーパーマーケットと、捕れたばかりの海獣類を売る市場。ヨーロッパの経済システムと物質文化を受け入れながら、グリーンランドの習慣も共存する生活は、これらの店にも象徴されているようだ。

カミヤさんの家で

博物館の調査でめいっぱいと考えていたのに、思いもよらず家庭に招いていただくという嬉しいことがあった。

カコルトックのヘリポートに着くと、日本語で声をかけられた。網走を出て三週間、二度ほどの電話以外日本語を口にしなかったので少々驚いた。迎えに来てくれたカミヤさんは五十歳台の日本人男性。デンマークの大学を出たあと本国で仕事をしてきて、十年前からカコルトック役場に勤めているという。博物館長のニューゴー氏から聞き、車で来てくださったのだ。このように初日から親切にしていただき、四泊の滞在中あつかましくも三晩もご自宅で夕食をごちそうになった。

小高い住宅地には、色鮮やかな外壁のこじんまりとした家が立ち並んでいる。庭には花や野菜類が植えられており、「ここだけ見たら、グリーンランドとは思えないでしょう」とカミヤさんがおっしゃるとおり、背丈が一メートル以上に伸びたものもある。出迎えてくれたおつれあいのナンナさんは、にこやかで料理の上手なグリーンランダーで、病院にお勤めだという。ご飯、手作りの豆腐、味噌汁といった久しぶりの日本の味もうれしかったが、刺身のエビ、ミンククジラのステーキ、サケの塩焼きなどの現地の食材料理もたっぷり味わわせていただいた。最後の晩は、ナンナさんの弟さん一家と撃ってきたばかりのハシブトウミガラスの蒸し焼きをごちそうになった。大人六人とイヌ二匹で、二羽のウミガラスは嘴しか残らないくらいきれいに平らげられた。

九時頃まで明るい晩のひとときを、グリーンランドの気候のことから、住環境、教育、労働時間、北欧の一国らしくいきとどいた福祉のこと、オウム事件をはじめとする最近の日本のことなどさまざまな話をして過ごした。そして「日本に帰りたいかい」という問いには「目的の仕事を果たす、という意味では予定どおりに帰りたい」と答えたが、「日本はいいかい」と聞かれると、何とも返事につまってしまう。日本での自分の暮らしは猥雑なものに思えた。

ホテルのタオルと環境保全

滞在中、いくつかのホテルで次のようなメッセージを目にした。「グリーンランドの自然は世界のどこにも見られないユニークなもので、私たちはそれを守りたい。想像してみてください、世界中のホテルで必要もないのに何万トンものタオルが毎日洗われ、洗剤が海や川を汚染している様子を。もしあなたが、タオルをバスルームの床に置いたら、取り替えてほしい、ホルダーにかけたままならば、もう一度使うことを意味します。それを決めるのはあなたです。」このような環境に配慮した取り組みは、他地域でも増えてきているようだが、ことグリーンランドでは陸地だけを見れば手つかずの自然のようでも海を守るのは切実な問題だろう。

農作物の育ちにくいこの地で食料を得るには、狩猟と漁撈に頼るのは当然のことであり、イヌイトたちはずっとそうしてきた。現在、GNPの七十〜八十パーセントは漁業によるもので、輸出先は主にEUと日本だという。狩猟で生計を立てているのは今や四〜五パーセントというが、北部や東部では主要な産業である。魚介類・海獣・鳥といった海の動物資源をどう利用するかが、経済活動の重要な部分と考えられる。

ヨーロッパに属しながら、特殊な自然環境の下、それらをどう活かし、伝統的な文化をも保持するか、グリーンランドの現在と未来からは目が離せない。